

主 題：神は不公平なお方なのか

聖書箇所：ローマ人への手紙 9章14-23節

前回私たちは、主なる神はご自分が選ばれた人々に祝福を、救いを与えられるということ学びました。主なる神はイシュマエルではなくイサクを選びました。すなわち、神はアブラハムのすべての子どもたちに同様の祝福を与えたのではありませんでした。神はイサクを特別に選んだのです。また、主なる神はイサクの二人の子どもを同様に祝されたのでもありませんでした。神はエサウではなくヤコブを選びました。彼らが生まれる前から、彼らが善と悪を行なう前から、神はヤコブを選ばれたとみことばが教えていました。

つまり、私たちがこれまで見て来たことは、すべて神の選択であること、神の選びがあるということでした。私たちが何かを行なったから神が私たちを選んだのではなく、神がご自分の意志をもって私たちを選ばれたと、そのことを私たちは見て来たのです。でも、この「選び」ということを学ぶと、必ず次のような疑問が出て来ます。それは「選ばれる人がいるということはそうではない人がいるということになります。それなら神は不公平ではありませんか？神はえこひいきをしておられるのではありませんか？ある人たちを選んだとするなら、選ばれなかった人たちがいるではないですか？神さまは平等ではありません。」と、このように考える人たちがいることをパウロは知っていました。そして、このような考えを持つ人は、パウロの時代だけでなくその後にもたくさん出て来ました。また特に、この平等さを強調する民主主義の影響を受けている社会においては、このような疑問を抱く人が多く存在するということが理解するに難しくありません。

ただ私たちが考えなければいけないことは、果たして、それが神の前に正しいことなのかどうかです。本当に神は不公平なお方なのでしょうか？そのことについてパウロが答えを与えるのです。パウロは今、私たちが見て行こうとしているこの14節から、その当時の人々が抱えていた二つの質問を上げて、それに答えを与えています。人々が持った様々な疑問に対してパウロが何と教えているのか、そのことをごいっしょに見て行きましょう。

★神は不公平なお方なのか？

A. 質問1. : 「神に不正があるのか？」 14節

14節「それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。」、今見たように、ある人を選びある人を選ばないというようなことをされる神は不公平であると言います。

答え：「絶対にそんなことはありません。」

それに対してパウロは14節の後半に「絶対にそんなことはありません。」と答えています。これは非常に強い否定を現わす否定文です。「決してそうではない！絶対にそうではない！」という否定の最も強い表現形式を使っています。神に不義などない、神には罪などない、神は不公平ではないと、パウロはそうのように真っ向から否定をします。実は、そのような疑問に対して、パウロがこのような答えを与えているのはこの箇所が初めてではなくて、ローマ人への手紙3章でもパウロはもうすでに同じことを語っていました。3：4「絶対にそんなことはありません。」とあり、6節にも「絶対にそんなことはありません。」とあります。すでに学んだ箇所ですから詳しい説明はしませんが、読者の中には二つの大きな間違いがあったのです。

◎読者の間違った理解

(1) 神の約束に関する誤解

「神はすべてのイスラエルを救うと言われた。でも、現実を見ると彼らは救われていない。神さまは約束を守らないのではないのか？神さまは嘘つきではないのか？」と。それに対してパウロは「絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。」(4節)、人間は嘘をつくことがあっても神はそうではない、嘘をおつきにならない、神は真実なお方だ、約束されたことを必ず守られるお方だ。問題は、神の約束を正しく理解しなかったあなたたちにある。神が約束されたことは、神が選ばれ神を信じた者たちに救いを与えられることであって、すべてのイスラエル民族が救いに与ることではないのだと、そのように言うのです。ですから、パウロは彼らの誤った解釈をここで正すのです。

(2) 神のさばきに関する誤解

6節でも「絶対にそんなことはありません。」と言いました。読者たちはさばきに関しても誤った解釈を

していたのです。そこで「もしそうだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか。」と言います。いずれにしろ、パウロはもうすでにこのように言う人々の間違った神観に対して、真っ向から否定したのです。神は真実な約束を守られる方であると。

ローマ書に戻って、この9章で、神に不正があるのか？不公平なのか？それに対してパウロは「決して、絶対にそんなことはない。」と言いました。パウロはそのことを旧約聖書のみことばを二つ引用することによって説明しようとしています。

◎旧約聖書のみことばから神の選びについて説明する 15-18節

1) 出エジプト33:19 → 15-16節

一つ目は15節に出て来ます。「神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。」、これは旧約聖書出エジプト記33章19節のみことばを引用しています。「主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」と。どういうことがあったのか？このみことばを理解するために、私たちはその背景を知ることが必要です。出エジプト記32章から見て行くと、モーセはシナイ山を登って行きました。モーセはそこで神から十戒をいただくのです。ところが、山に登ったモーセがなかなか降りて来ないので、ふもとにいたイスラエルの民たちは「さあ、私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちがエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。」と、このようにアロンに詰め寄るのです。私たちがこれから導いて行ってくれる神を造れと。ご存じのようにその後彼らは金の子牛を造るのです。モーセが山から下りて来たときに見た光景は、乱れた民とアロンが物笑いになっている様子でした。そこでモーセは次のようなことをイスラエルの民に言うのです。32:26「そこでモーセは宿営の入口に立って「だれでも、主につく者は、私のところに。」と言った。するとレビ族がみな、彼のところに集まった。」と。その後、28節「レビ族は、モーセのことばどおりに行なった。その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。」とあります。

今、私たちが考えたいことは、確かに、イスラエルの罪に対して神は彼らをさばかれました。金の子牛を造った彼らをさばかれたのですが、皆さん、この「三千人」はイスラエルの民の中で神の前に罪を犯したすべての人数だったと思いますか？罪を犯したすべての人たちだとそのように思いますか？そうではないのです。というのは、32章のその後を見ると、30節「翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。それで今、私は主のところへ上って行く。たぶんあなたがたの罪のために贖うことができるでしょう。」と、このように読むと、罪を犯した人たちの中にまだこの地上に生き残っていた者たちがいたことが分かります。みな殺された訳ではなかったのです。罪を犯した者の中に死んだ者と死ななかった者たちがいたのです。

その後どうなったでしょう？33章7節辺りから見て行くと、7節「モーセはいつも天幕を取り、自分のためにこれを宿営の外の、宿営から離れた所に張り、そしてこれを会見の天幕と呼んでいた。だれでも主に伺いを立てる者は、宿営の外にある会見の天幕に行くのであった。」、モーセは自分たちが寝泊まりしているところから少し離れた所に天幕を作ってそこで神と交わったのです。そこを「会見の天幕」と呼びました。人々が神の前にお伺いを立てるときにはそこに出かけて行ったのです。そのときの様子が書かれています。8-10節「モーセがこの天幕に出て行くときは、民はみな立ち上がり、おのおの自分の天幕の入口に立って、モーセが天幕にはいるまで、彼を見守った。:9 モーセが天幕にはいると、雲の柱が降りて来て、天幕の入口に立った。主はモーセと語られた。:10 民は、みな、天幕の入口に雲の柱が立つのを見た。民はみな立って、おのおの自分の天幕の入口で伏し拝んだ。」、モーセが会見の天幕にはいつている間に周りではこのようなことが行なわれていたのです。人々はこの雲の柱を見て神を伏し拝んだのです。そこに神が臨在されていることを見たからです。そして、天幕の中にいたモーセは神と親しい交わりのときを持っていました。その会話の中でモーセは三つのことを神に願いました。

◎モーセが神に願った三つのこと

(1) 民に対する神ご自身のお考えを知りたい 12-14節

「:12 さて、モーセは主に申し上げた。「ご覧ください。あなたは私に、『この民を連れて上れ。』と仰せになります。しかし、だれを私といっしょに遣わすかを知らせてくださいません。しかも、あなたご自身で、『わたしは、あなたを名ざして選び出した。あなたは特にわたしの心にかなっている。』と仰せになりました。:13 今、もしも、私があるあなたのお心にかなっているのですしたら、どうか、あなたの道を教えてください。そうすれば、私はあなたを知ることができ、あなたのお心にかなうようになれるでしょう。この国民があなたの民であることをお心に留めてください。」:14 すると主は仰せられた。「わたし自身がいっしょに行って、あなたを休ませよう。」

(2) 神が民とともに行ってくださる確かな証拠を知りたい 15-17節

「それでモーセは申し上げた。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。:16 私とあなたの民とが、あなたのお心にかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないのでしょうか。」:17 主はモーセに仰せられた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから。」、自分たちと神がともに出かけて行くのでなければ勝利がないということをモーセは知っていたのです。ですから、モーセは神がともに行きたくて願いました。そして、その約束、その証拠を知りたいと言うのです。

(3) あなたの栄光を私に見せてください 18節

「すると、モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」、そのとき主はモーセにこのように仰せられました。19節「主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」これが今私たちが見ているローマ人への手紙9章15節に引用されていることばです。神はここで何を教えるようになったのでしょうか？神ご自身はみこころのままにあわれみを為されるということです。モーセが何かをしたからとか、モーセがこのような人物になったからあわれむというのではなく、神はご自分の思い通りにすべてのことを為すと言うのです。神が恵もうと思えば恵むし、あわれもうと思えば神はあわれみを示されるのです。すべてこれは神ご自身がお決めになることだと、そのことを強調しているのです。

なぜなら、私たちの神は主権者であり創造主です。主のみこころだけが常に成るのです。ですから、ローマ9:16に戻って、「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」と記されています。神はご自分の完全な計画に基づき、ご自分のお考えに基づいてすべてのことを為しておられるのです。神にはその権利があるのです。ご自分が望むことを行なわれ、ご自分が良しと思うことを為さるのです。この方は完全なお方ですから為されるすべてのことは完全なことです。そのような存在だとパウロは教えるのです。

2) 出エジプト9:16 → 17-18節

もう一つは、同じ出エジプト記9章16節のみことばがローマ9:17に引用されています。17節「聖書はパロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである。」と言っています。」、この意味を理解するために、同じように背景を知ることが必要です。神はモーセをエジプトの地に遣わしました。何のためですか？エジプトに捕らわれているイスラエルの民を解放するためです。そして幾つかの災いがもたらされました。「十の災い」がエジプトに下されたのです。一つ目は「ナイルの水が血に変わる」災いでした。二つ目は「かえる」の災いでした。三つ目は「ぶよ」の災いでした。四つ目は「あぶ」による災いでした。五つ目は「疫病」でした。そして、六つ目は、出エジプト9:8から記されています。「主はモーセとアロンに仰せられた。「あなたがたは、かまどのすすを両手いっぱいに取り。モーセはパロの前で、それを天に向けてまき散らせ。:9 それが出エジプト全土にわたって、細かいほこりとなると、エジプト全土の人と獣につき、うみの出る腫物となる。」:10 それで彼らはかまどのすすを取ってパロの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と獣につき、うみの出る腫物となった。」、このような災いが起こったのです。そして、この災いが起こった後、モーセがパロに告げているのが9:16です。「それにもかかわらず、わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである。」、モーセとエジプト王パロとのやりとりです。「わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。」とありますが、この「立てておく」ということばが非常に面白いのです。

というのは、「立てる」ということばは「登場させる、出現させる」という意味をもっています。つまり、ここでモーセは神のメッセージをパロに伝えたのです。神は「わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。」、あなたがこの地上に存在しているのは、あなたが今王として君臨しているのはこの目的のためだと言うのです。それは神ご自身がご自分の力を示すため、その目的のためにわたしはあなたを王として立てたということです。歴史をすべて司っておられる神だからです。神がみこころに沿って、そのときにその必要な人物を置いておられるのです。ですから、パロを通して、神がどんなに力のある方であり、どんなに偉大な方であるのかが明らかになりました。

今、私たちは旧約のこの時に起こった出来事のみことばを通して知ることができます。先ほど「十の災い」のことを話しましたが、1回目の災いでナイルの水が血に変わったことではパロは「もう行ってください。イスラエルの民を行かせてください。」とは言わなかったのです。十の災いが起こることによって、神がどのようなお方であるかということが明らかにされたのです。その当時のイスラエル人も、エジプト人たちもそれを見たのです。そして、それから何千年も経った私たちも、この出来事を見て、何とすごい神なのだろうと神の力を見て驚くのです。ご存じのようにこの後、7番目は「雹」の災いで

した。8番目は「いなご」でした。9番目は「闇」がエジプトの全土を覆いました。そして、10番目は「初子が殺される」という災いでした。神はこのようなわざをエジプトの地に成したのです。そして、この災いが十もくだったようにパロの心はかたくなでした。そして、このかたくななパロを通してこのようなわざが成されたのです。

そして、ローマ書に戻って、パウロはこれらのことを話した上でこのような結論を述べるのです。

9：18「こういうわけで、神は、人を見こころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。」、今見て来たように、15節「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、」、人が何かをしたからではありません。神ご自身がそのように選択をして、あわれもうと思う者を自分の意志であわれむ、「主権は神にある」と言うのです。同時に、パウロはここで、この災いを通して為されたみわざをもって、実は、「心をかたくなにする」ことも神のわざであると言います。つまり、神はすべてのことをご自分の意のままに成される、ご自分の計画のままになされるのです。それを通して、この私たちの神はすべての主権者であるということをはっきりと示したのです。すべてのことは神のみこころのままに為された。そこで私たちが考えなければいけないことは、「あわれみ」はよく分かるのですが、「かたくな」ということについてです。「かたくな」に関していろいろな疑問が出て来ます。このことばは「堅くする、頑固にする、意固地」という意味を持っています。今見て来たように、パロが心をかたくなにする事によってイスラエルだけでなく、エジプトの人たちもこの神の偉大さを目の当たりにしました。そのためにパロが立てられ、そのために彼の心がかたくなにされたこと、確かにそのことを見て来ました。このように学んで行くとある人々はこう言います。「パロが神の前に悪を行った。でも、それは神がパロの心をかたくなにしたからではないですか？それなら、彼の悪の責任は彼にではなく神ご自身にあるのではないですか？なぜなら、神ご自身がパロの心をかたくなにして、神に逆らうようなことをさせたから…」と、そのような疑問は出て来るのです。神がパロの心をかたくなにした、パロが神に逆らい続けた、でも、そのような心にしたのが神であるなら、その責任は神でしょう。その責任をパロに問うというのはおかしいではないですか？と。その考え方が間違っていることをこれから見て行きます。

◎「かたくな」

1) 神が心をかたくなにした

確かに、出エジプト記の4章から14章の中に、パロの心がかたくなになったということが20回出て来ます。そのように記されているところが20箇所あります。

4：21：「主はモーセに仰せられた。「エジプトに帰って行ったら、わたしがあなたの手授けた不思議を、ことごとく心に留め、それをパロの前で行なえ。しかし、わたしは彼の心をかたくなにする。彼は民を去らせないであろう。」、神がモーセをエジプトに送ると言われたときから、神はそのことを預言なさったのです。あなたは行っていろいろな奇蹟を行なうけれど、パロの心はかたくなになると、モーセがエジプトに行く前からそのようなことを告げられたのです。ですから、確かに、この出エジプト記を読んで行くと、神ご自身がパロの心をかたくなにしたと記されている箇所はたくさん出て来ます。

7：3＝「わたしはパロの心をかたくなにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で多く行なおう。」

9：12＝「しかし、主はパロの心をかたくなにされ、彼はふたりの言うことを聞き入れなかった。主がモーセに言われたとおりでである。」

10：1, 20, 27＝「1 主はモーセに仰せられた。「パロのところに行け。わたしは彼とその家臣たちを強情にした。それは、わたしがわたしのこれらのしるしを彼らの中に、行なうためであり、」「20 しかし主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエル人を行かせなかった。」「27 しかし、主はパロの心をかたくなにされた。パロは彼らを行かせようとはしなかった。」

11：10＝「モーセとアロンは、パロの前でこれらの不思議をみな行なった。しかし主はパロの心をかたくなにされ、パロはイスラエル人を自分の国から出て行かせなかった。」

14：4, 8, 17＝「4 わたしはパロの心をかたくなにし、彼が彼らのあとを追えば、パロとその全軍勢を通してわたしは栄光を現わし、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。」そこでイスラエル人はそのとおりにした。」「8 主がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、パロはイスラエル人を追跡した。しかしイスラエル人は臆することなく出て行った。」「17 見よ。わたしはエジプト人の心をかたくなにする。彼らとそのあとからはいつて来ると、わたしはパロとその全軍勢、戦車と騎兵を通して、わたしの栄光を現わそう。」

でも、それだけではないのです。

2) パロ自身が心をかたくなにした

7：13＝「それでもパロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が仰せられたとおりでである。」

8 : 15, 32 = 「:8 ところが、パロは息つく暇のできたのを見て、強情になり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主の言われたとおりでである。」 :32 しかし、パロはこのときも強情になり、民を行かせなかった。」

9 : 34 = 「パロは雨と雹と雷がやんだのを見たとき、またも罪を犯し、彼とその家臣たちは強情になった。」

今、幾つかの箇所を見て来ましたが、確かに、神ご自身がパロの心をかたくなにしたと記されています。しかし同時に、パロ自身が自分の心をかたくなにした、強情にしたとも書かれています。「神がパロの心をかたくなにした」、そして、「パロ自身が自分の心をかたくなにした」と二つのことが記されています。実は、神ご自身はパロが自分の心をかたくなにすることを赦されたのです。この「かたくなにする」という行為は、神の行為ではなくパロ自身の行為なのです。

すでに私たちが見て来たように、ローマ書1章でパウロは次のように教えていました。1 : 28 「また、彼らが神を知ろうとしがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。」と。つまり、神が人々を良くない悪い思いに引き渡され、その結果、人々がますます悪を行うようになったのは、神がさせたのではなくて、人々がそのような選択をし続けるゆえに、神は「それなら好きにきなさい」とそのようになさったということです。ですから、みことばを見て明らかなことは、神の前に心をかたくなにしたのはパロだったのです。彼はそのような選択をしたのです。そして、神は彼がかたくなになることを良しとされたのです。

このように今日のテキストを見たときに、確かに、神はご自分が望んで人をあわれもうと思えばあわれむし、かたくなにしようと思えばかたくなにできるのです。その権利を持っておられる方です。実際に、なぜパロが心をかたくなにしたのでしょうか？彼の意志に反して神がわざとされたのでしょうか？そうではなく、彼自身がそのような選択をしたのです。彼自身が神の前にかたくなであり続けるという選択をしたのです。責任は神にはではなくパロ自身にあるのです。そのことはもう少し後で見て行きます。ですから、まず、パウロがここで私たちに教えようとしていることは、神はご自分の望むことを行なう権利を持っておられる方だということです。神がご自分の栄光を現わすために、私たち被造物をどのように用いるのか？そのことに関して、私たちは口を挟む権利を持っていないと言うのです。なぜなら、神はすべての主権者でありこの方が王だからです。このように言うと、ある人たちはこんな質問をします。それが二つ目の質問です。

B. 質問2. : 「救いが神の選びなら、どうして滅んだ人を責めることができるのか？」 19節

19節「すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」、すべて神のみこころのままに成される、神のご計画に沿って成されて行く、それなら、選ばれていない人が信じないのは選ばれなかったからで、その人をさばくことはおかしいではないですか？と、これが質問です。

答え：自分を弁える(わきまえる)こと

それに対してパウロは、20節「しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。」と、「自分をわきまえなさい」と言うのです。なぜなら、20節を見ると「人よ。」とあります。そして、続いて「神に…」とあります。これは「人」と「神」をここで対照しているのです。悲しいことに、私たち被造物は自分が造られたものでありながら、いつの間にか、自らを創造主なる神と同等の位に置いてしまっているのです。私たちの問題は私たち自身の傲慢さです。私たちは自分が納得しないと神のみわざを受け入れないのです。ですから、今私たちが見て来た質問はみなそこに共通点があります。「いったい、おまえは何者だ？」と言うのです。あなたは土から造られたものに過ぎない、そのことをこれから説明して行くのです。神によって造られたあなたが造り主なる神にどうして意見をすることができるのかと言うのです。自分をわきまえなさい、この方にはどんなことでもご自分の思いのままに成すことができる、自分の思いのままにすべてのことを行なえるその権利と権威があると言います。そのことをパウロは20節の後半から、陶器師と土の例を上げて説明しようとしています。

◎陶器師と土の例 20-23節

1) 陶器師の権利 21節

20節「形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。」、当然答えはノーです。言えません。造られた者たちはそんな権利は持っていません。21節を見ると、陶器師の権利が書かれています。「陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。」、つまり陶器師はどのような器でも作る権利を持っています。自分の思いのままに造ることができるのが彼の権

利です。だれもそれに対して「なぜそのようなものを造るのですか？」と文句を付けることはできないのです。陶器師自身の権利だからです。自分の思いのままに目的に沿って陶器を作るという権利です。

2) 神の権利 22-23節

そして、22節と23節を見ると、パウロは今度は神の権利について説明しています。陶器師に権利があるように、実は、創造主なる神にも権利があると、三つの権利を上げています。

(1) 滅ぼすこと 22節

22節「ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐して下さったとしたら、どうでしょうか。」、陶器師は自分の作った器の中で気に入らないものがあればそれを壊す権利を持っています。自分の造ったものを自分で壊すことができます。同じように、私たちが造られた神は、ご自分に逆らい続ける罪人を滅ぼす権利を持っているのです。私たちは造られた者だからです。イザヤ書64：8には「しかし、主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたものです。」とあります。だから、創造主なる神が私たちに何をしようと、それはこの方の権利なのです。

陶器師が目的をもって陶器を作るように、私たち被造物も陶器師である創造主なる神が目的をもって造って下さいました。その目的とは、この創造主なる神を心から愛することです。何ものよりも愛することです。そして、この方を心から愛して従って生きることです。しかし、残念ながら、私たちはみなその目的に沿って歩んでいません。逆らっています。

ローマ人への手紙6章の中でパウロが言うように、6：20-21「罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。：21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。」、創造主なる神を無視して、自分の好き勝手に生きていた、その人生が約束していたことは「永遠の滅び」、「永遠の地獄」でしかなかったと言うのです。「行き着く所は死です。」、永遠の死、霊的な死です。神から永遠に引き離されて、そして、永遠にこの地獄にあってさばきを受ける、そのことです。ですから、ローマ9：22を見ると、「ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐して下さったとしたら、どうでしょうか。」とあり、主に逆らう罪人は「滅ぼされるべき怒りの器」と表現されています。罪人は「滅ぼされるべき怒りの器」なのです。非常に厳しいことばが使われています。この器は神が怒りをもっておられる器なのです。なぜですか？神に逆らっているから、神の敵だからです。神ではなくて罪を愛して神に逆らい続けているからです。

ここで注目していただきたいのは「滅ぼされるべき」という動詞です。これは「滅びのために備えられている」とも訳せます。実は、ここで使われているこの動詞は受動態、受け身です。つまり、パウロはここでこのようなことを伝えたかったのです。「あなたたちが滅びる運命にある、滅びに向かっているその原因はあなたにある。あなたが神に逆らい続けているゆえに、あなた自身が神からいただくことは滅びである。」と。ですから、神ご自身が滅びを与えるというわけではありません。彼らが滅びに価することをしているがゆえに、滅びを自分の身に招くと言っているのです。だから、受け身なのです。パウロがローマ2：5で言ったように「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」と明確に教えています。なぜ、神があなたのことを怒っているのか、それはあなた自身に原因がある、あなたが神の前に逆らい続けているから、あなたのかたくなさ、いつまで経っても罪を悔い改めようとしないうこと、神の前に救いを求めて出て来ようとしないうその罪、それに対して神は怒りをもっておられるのです。ですから、「御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」、このように神に逆らい続けることによって、自分の罪をますます重くしていると言うのです。そして、それは必ず神の前に審判を受けます。さばかれるのです。そこにあるのは容赦ない永遠のさばきです。

しかし、パウロが明確にしたかったのは「そのような永遠の滅びに至る運命を約束されているのは、その人が誤った選択をしているからだ。」ということです。なぜなら、神は私たちが罪に誘惑される方ではありません。ヤコブ1：13-14に「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。：14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」とあります。なぜ、私たちは罪を犯すのでしょうか？あの人がかんなことをしたから…と言って、だれかに自分の罪の責任を転嫁することはできません。私たちが罪を犯すのは自分が罪を選択するからです。だから、その責任は自分に返ってくるのです。神はあなたを誘惑なさいません。あなたが自らの罪の誘惑に負けて罪を犯してしまうのです。私たちは罪を犯したいから罪を犯すのです。

ですから、神の権利としてこのような罪人を滅ぼす権利を持っているのです。自分の目的に沿うようにと思って造ったのに、それがいびつな形をしてこれは役に立たないと思ったら、陶器師はそれを割って壊すことができるように、神の計画に沿って生きない人々、神に逆らい続けている者たちを滅ぼすことは神の権利なのです。

(2) 忍耐をもつこと、あわれみをもつこと 22節

怒りを示してご自分の力を知らしめようと望んでおられる神、罪人をさばこう、そして、ご自分の聖さを現わそうと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を「豊かな寛容をもって忍耐してください」とあります。私たちが何か神のあわれみをいただくようなことをしたわけではありません。そんな人物になったのでもありません。しかし、神がご自分の権利でもって、そのように罪に汚れた者たちに寛容を示すこと、あわれみを示すこと、忍耐を示すこと、その権利を持っておられるのです。そう思うならそのように為さるのです。そして、感謝なことに、神はそのようなことを選択してくださったのです。ローマ2：4には「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」とあります。責められているのです。神はこうして罪人のあなたに寛容を示してください、あなたをあわれんでください、あなたが悔い改めに進むことを待ってくださいに、あなたはまだそこに出て行こうとしない、この神の忍耐、寛容を軽んじているのかと責められているのです。

実際に、私たちが見て来たあのパロに対してもその通りでした。神は第1回目の奇蹟で滅ぼすことができましたのです。しかし、神は何度も何度もパロに悔い改めの機会を与えました。私たちが考えなければいけないことは、どうしてこのように罪人を即座に滅ぼさずに、忍耐をもって罪人が悔い改めるのを待っていてくださる主を、私たちが責めることができるのかということです。このようにすばらしいあわれみに満ち溢れた神を、いったいだれが責めることができるのでしょうか？神は一方的にご自分の権利をもってあなたにあわれみを示してくれている、その神を責めるのはいったいだれか？その神に対して不公平だと言うのはだれか？神は私たちにこれ程にあわれみを示してくださっているのです。

(3) 救いを成すこと 23節

「それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです。」、「あらかじめ用意しておられたあわれみの器」、神があわれみを与え、栄光を得るようにと働かれたそのような器、そのような人たちのことです。別の言い方をすれば、神ご自身が救いへと選ばれた者たちのことです。しかも、この「あわれみの器」を用意されたのは神ご自身です。この23節の主語は神です。信仰者の皆さん、神はあなたを選んでくださった、あなたにこのようなあわれみを示してください、あなたを救ってくださいです。何のためですか？「その豊かな栄光を知らせてくださるために」です。栄光が明らかになるためにです。私たちはイエス・キリストを信じたときに、それは私たちの何かの行ないによるのでもないし、私たちの功績によるのでもありません。一方的な神の愛と恵みによって私は救われたということを私たちは実感しました。そして、そのときに、このような私をこんなにも愛してくださった神の偉大なその御力を、その恵みをその御栄を明らかに示されました。ゆえに、私たちはこの方を心から誉め称え、この方を大いに誇る者と生まれ変わったのです。

神の権利でした。神が私たちにこんなすばらしい働きを成してくださったのです。私たちは神のみわざを見たのです。こんな罪人が救われるというすばらしい神の奇蹟です。

さて、今日も二つの質問を見て来ました。もしこの中に、この当時の人々、またそれ以外にもこの地上にいた多くの人々と同じように、「神は不公平だ」と言ってこの神の救いを拒んでいる方がおられるなら、そのあなたに考えていただきたいことがあります。あなたは「神は不公平だ」と言ってこの神の救いを信じようとしていません。あなたが考えなければいけないことは、でも、そんなあなたのために救いが備えられているということです。そして、その救いを拒んでいるのはあなた自身だということです。あなたの意志によってこの救いを拒んでいるのです。あなたが選ばれているか選ばれていないかは良く分かりません。しかし、分かっていることは、神はあなたに救いのチャンスを与えてくださっている、あなたに悔い改めを命じておられる、しかし、あなたは意図的に自らの意志でもって「私はしたくありません」と言って神に逆らっていることです。その責任は神にあるのではないのです。その責任はあなたにあるのです。

考えなければいけないことは、あなたは神の救いを拒んでいるということです。あなたは神の敵として生き続けることを選択しているのです。あなたは神に逆らい続けて行くことを選択しているのです。あなたはキリストを十字架につけることを喜んでそれに賛成しています。あなたは神よりも自分を優先しています。あなたは救いよりもさばきを選択しているのです。そして、あなたは永遠のいのちよりも永遠の地獄を選択しているのです。

あなたを救ってくださるあわれみの神に不平不満や文句を言う前に、あなたは自分の責任を今一度吟味しなければいけないのです。神に逆らっているのはあなたなのです。神の救いを拒んでいるのはあなたなのです。ですから、私たちに必要なこと、人間に必要なことは、この神の前にひざまづくことです。このお方の前にひれ伏すことです。傲慢になるのではなく、この方の前に謙虚になることです。この方は神なのです。あなたはただの土くれなのです。そのことを学ばなければ、あなたは決して主の前に救いを求めて出て行く、そのような選択をすることはありません。あなたはいつまで経っても神に文句を言い続けます。「なぜ、こんなことを為さるのですか？」と。気付かなければいけません。私たちは神ではないのです。皆さん、私たちはただの罪人にすぎないのです。あわれみを受ける資格の全くない者です。救われる資格の全くない者です。

でも、そんな私たちを神はこんなにあわれんでくださっているのです。私たちに救いを与えてくださっているのです。ヤコブは言います。ヤコブ5：11「…主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方ということです。」。なぜ、そんなお方を拒み続けるのですか？なぜ、こんな慈愛とあわれみに満ちあふれた方に「あなたは不公平だ」と、そのようなことを言うのですか？

神がどんな方であるかを見て来ました。もし、そのようなことを知った上で、神の前に私たちがまだ不平を言い続けるのなら、私たちは覚えなければいけません。あなたのためにいのちを捨ててくださった神が、どれほどあなたに対して心を痛めているかということです。私たちの神はこのような慈愛に富んだお方です。あわれみに満ちあふれたお方です。主が与えてくださったことを覚えることです。この恵みを覚えることです。このすばらしい救いを覚えることです。そして、不満ではなくて感謝をささげることです。この方はそれにふさわしいお方だからです。

まとめ：

- ・主イエスを信じないことは、だれの責任ですか？
- ・このように未信者が救いに関して神を責める原因は何だと思えますか？
- ・私たち信仰者が神に対して不平を言うのはどうしてだと思えますか？